

字幕文化の向上

字幕研究プロジェクト

代表研究者	香川 宏	字幕文化推進協会	理事長
共同研究者	藤沢 優	字幕文化推進協会	理事
"	池田 肇	字幕文化推進協会	会員
"	金 正美	字幕文化推進協会	理事
"	落合 康興	字幕文化推進協会	会員
"	鈴木 みどり	字幕文化推進協会	会員

目 的

放送利用促進の鍵を握る分野の一つとして、NHKは放送の完全字幕化の期限を2006年に繰り上げた。基本的人権としての情報保障に対する、放送メディアの強い決意がうかがわれる。今年度は、昨年度に引き続き放送字幕の研究を行い、素材はドキュメンタリー番組とアニメーション番組とする。また、字幕の視覚認知についても引き続き研究を行うこととする。さらに今年度は、字幕制作機器と人間系との相互機能に着目し、字幕制作作業の効率化と品質の向上、そしてコストの軽減化を検証する。

方 法

放送字幕の研究では、字幕研究プロジェクトの字幕制作メンバーが、NHKにんげんドキュメント「津軽・故郷の光の中へ」、テレビ朝日「ドラえもん」の字幕を新機器SST制作システムによって実際に制作し、新たな字幕の可能性を検証した。

字幕制作機器については、機器導入によって制作作業の効率化、品質の向上、コスト計算など事業の活性化にどう機能できるのかを検証した。

字幕の視覚認知の基礎的考察については、有効視野とは何かを問いながら、字幕のレイアウトの重要性を集約した。

結 果

放送字幕の研究のうち、ドキュメンタリー番組の字幕研究では、オープン・キャプションで元から入っている字幕に対し、情報保障として入れるクローズド・キャプションをどのようにわかりやすく併記するかが大きな課題となった。また映像設計、音声設計、字幕設計のバランスが問われる作品だけに貴重な事例研究となった。説明過多にならないよう、元のスーパーを生かして字幕と映像をゆっくり見せるよう工夫した。アニメーション番組の研究では、動きのある画面とキャラクターの表情、ストーリー展開のテンポをくずさないように字幕を制作してみた。従来の1秒4文字の計算ではなく、1秒5～6文字の計算で作ることによって、これまでのように口の動きと字幕送時のタイミングがずれることなく、なおかつ時間内に読みきれなど、従来の問題をクリアする可能性を模索することができた。また擬声語や擬態語をどのように強調して見せるかについては、新制作機器であらゆるフォントや色を使って、実際に映像と合成しながら、これまででは考えられなかったレイアウトや個性的な字幕の可能性を見出すことができた。子供たちの情操教育に大きな影響を与える分野だけに、今後も継続検討を進めたい。

字幕制作機器の検証では、従来の手書き原稿による制作手法から比べてその制作時間が、人によっては3分の1くらいまでに短縮できるということがわかった。また現在は、一般的に放送字幕の文字位置は、画面横下に2行で入れられていることが多いが、縦位置2行や中央などあらゆる文字位置での制作を検証してみた。実際に映像画面と合成して見ることができるので、これまでできなかった研究ができ、新たな字幕の可能性を模索できるようになった。コスト計算などについては、放送局で使用する制作機との互換性がないため、現時点では結果は出ないが、放送局との

業務改善への可能性を探っている。

字幕の視覚認知については、字幕のレイアウトは「見る」ではなく「読む」の観点に立って考えるべきである。画面上の表記の仕方は、視野、焦点の移動、視覚上の記憶や注意力と絡んで問題点は微妙である。これに関しては一層の追跡、検証の必要があると感じた。

研究発表

字幕研究報告書のレポートをまとめ、会員に配布。また、NHK青山荘にて研究会を随時開催し、交流・研鑽を図った。今後の計画として大学などで「キャンパスセミナー」を開催し、字幕の啓蒙、普及に「努めたい。併せて体験学習として、パソコン字幕制作の集中講座を開設する。(学生、一般対象)

連絡先

〒164-0001 中野区本町 6-20-7 (株)N総合企画センター 金 正美